

## 心中

三月四日の北京の新聞に日本人が西山旅館で情死した事件が載った。女は朝日軒の芸妓で名を来香と言ひ、男は山中商会の店員「一鵬」だと言うことである。こうした名前は聞いて少しおかしいので、さらに『国民新報』の英文部を調べて来香は梅香（Umeka）の誤り、これはいわゆる芸名で、本名は日向信子、十九歳、一鵬は伊藤伝三郎、二十五歳であることがわかった。情死の原因ははっきりしないが、死者の身分から見れば、たぶんお互いに好き合ったが様々な障碍から思い通りにゆかず、別れて生きるよりは相抱いて死んだほうが増したというので、こうなったのであろう。

こうした情死は中国では滅多にないが、日本ではごく普通で、佐々醒雪の『日本情史』<sup>i</sup>（日本文学における恋愛史論ということができ、中国の『情史』とは性質が違ふ。一九〇九年出版）は、南北朝（十四世紀）の『吉野拾遺』の中に里村主税家の若党と内侍の女とが身を寄せるところを失って、深い山に入って共に刃に伏して死んだと言う。六百年前にすでにそういうことがあったのである。「この男女が“此の世こそつたなからめ、後の世は久しう”と語らつたとあるのは、やがて元禄式情死の先蹤である。この南北朝から足利期（十五六世紀）は、かの二世の契といふ思想の漸く明かになつた時代で、近世に入つては、寛文（1661～72）前後のものに見える伊予の田舎唄にも、

闇の丸木橋さまとなら渡ろ、落ちて流れて後の世もともに、  
と謡つてゐる。

驕華奢靡の間にも、なほ殺伐な蛮気を帯びて、思ひ切りのよい気象を尚んでゐた元禄期（1688～1703）には、二世の契といふ感念に伴うて、自ら悲惨なる情死者を出すべき傾向をもつてゐたのである。」

このような情死を日本では通称「心中」（Shinjiu）と言う。情死の事実は「古巳に之有り」で、南北朝にすでに様々な記載に見えているけれども、心中という名前は徳川時代の産物である。もともと心中という言葉の意味は字の通りで、衷情と言うようなもので、後に転じて心跡を示す行為、誓文を書くとか、刺青、断髪などを言うことになった。寛文前後は遊女の社会でも殺伐な心中が起き、爪を抜くとか、指を切るとか、あるいは腕や腿を刺し貫くとかした。さらにもう一步進むと自然と死をもつて相愛の心を表明することになった。西鶴はそれを「心中死」（Shinjiusi）と言ひ、近松の戯曲では心中という言葉はほとんど男女二人の情死に限られるようになった。この風気はずっと現在にまで流れて、心中は情死の代名詞になった。

（誓文を書くのは今では流行らなくなったようである。尾崎久弥の著『江戸軟派雑考』<sup>ii</sup>では古本の情書指南『袖中仮名文』によってサンプルを一篇<sup>iii</sup>引いているので、今特にここに訳す。

### 誓い

今某人と夫婦たるを約す、眞実にして虚なし、たとい父母兄弟の如何に阻碍するとも、決して別に人に適くことあらじ。もし言うところ少しく虚偽あらば、まさに日本六十余州の神々の罰を受くべく、未来永劫地獄に落ちて、出る時あるなからん。須く至つて誓う者なり。年月日 女

名（血印） 某人（男名）

中国にはもと『青楼尺牘』などの書があったが、そこにこうした類のものがあるのかどうか知らない。）

近松は日本で最も偉大な古劇の作家であり、彼の著作はわたしから見れば中国の元曲よりもまだ趣味がある。彼が書いた世話浄瑠璃（社会劇）はほとんどが心中物であり、しかも彼はとてもそうした痴男痴女に同情的である。みすみす彼らが私情と義理の間に挟まれて、まるで罌にはまったネズミのように、どのみち抜けられず、ただ先延ばしにして苦痛を増すだけで、彼らの唯一の出口は「死」でしかない、そして彼らの死は何の英雄的でもあり得ず又超脱的でもない、彼らの「一蓮托生」の願望は実はとても幼稚でおかしいのだが、しかしわれわれはそれを笑えぬばかりか、全心込めて彼らの大願が成就し、本当に西方浄土に往生して、今生で終えられなかった縁を続けられるよう希うのである。これはもとよりわれわれ凡人の思想である。だが詩人も結局は凡人の代表に過ぎない。まして近松は民衆を慰藉し楽しませるのを事とする詩人である。彼が心中を詠嘆するのは当然の事で、近松の浄瑠璃が盛行して以後民間の男女の心中事件が大幅に増えたということである。その勢力の大きさが想像できる。しかし本当に心中を鼓吹した芸術は、浄瑠璃の別の一派ということになる。すなわち新内節（Shinnai-bushi）である。新内節の心中に対する熱狂的な憧れはほとんど病的だと言うことができる。三七二十一に関わらずただ一死をもって帰宿とする。新吉原の遊女がこの遊行の新内派の哀歌を聞いてはしなくも多くの悲劇を引き起こしたので、政府は文化初年（十九世紀初）新内節が吉原に入ることを禁じ、ただ中元に一日だけ許可し、盂蘭盆の供養とし、そのまま明治維新になってようやく解禁された。新内節は一種の曲<sup>うた</sup>で、かつ語りかつ歌う。翻訳はほとんど不可能だが、いま「藤蔓恋のしがらみ」の末尾数節<sup>くち</sup>を摘訳して、心中した男女への回向とする。この篇は鶴賀新内の作で、藤屋喜之助と菱野屋の遊女早衣との末路を述べ、篇名は喜之助の屋号藤の字を敷衍してできている。おそらく一七七〇年ごろの作だという。（『江戸軟派雑考』による）

「世の中にわたしほど苦しい運命の人はない。五、六歳のころ二親に死に別れ、一人の兄に頼って、一日一日苦しい歳月を送ってきた。後になって二進も三進も行かなくなって、そのままここへ売られてこんな生業する羽目に。ややもすればやり手婆あに責められて、新造として相手に出、夜通し客にいびられて、やっとの事で涙に濡れた袖を易え、一人前となりたれば、あなたを見つけ我が一生の頼りとす。たとい荒れ野の果て、深山の奥でさえ、どんな貧苦もいとやせぬ、手づから飯炊きみんなに食わしよ。楽も恋なら、苦も恋よ、恋という字の意味は明らか、恋こそただ忍耐という事。——あまりに可愛くて、人は想い極まり愚痴になる、起請を見張る神々も見ようとはせず。どうせ添われぬ縁なれば、いっそ一緒に殺してください。ここまで言うと、袖は早涙の湖、男も涙をたたえた顔を挙げ、早衣に一声、もともと人は風前の灯、この世は夢の宿、願いはただ一つ、未来は蓮華の座を共にせんことを。このことを聞くや、早衣は思わず喜びの涙をこぼす。草葉の陰の父母よ、きっと喜んでくださるわ、命を共にした人を連れて会いにゆきましょう。どうかわたしを恨まずに、非命に斃れる罪科を許してくださいな。閻魔様が罰を下さるなら、どうかわたしのために謝ってくださいな。祐天様、お釈迦様わたしを見捨てになり

ますまい？お側に仕えて、朝な夕な、心を込めて茶湯香華をお供えし、この世の罪を消しましう。南無祐天様、釈迦如来様！どうぞわたしをお助け下さい。南無阿弥陀仏！」（祐天上人は享保時代——十八世紀初——の人、浄土宗中興の祖、江戸の人はとても崇敬したので、遊女はそれで彼と釈迦如来をごっちゃにしたのである。）

木下杢太郎（医学博士太田正雄の別号）は彼の詩集『食後の唄』の序で「かの卑俗で涙に満ちた江戸の平民芸術」に言及する。こうした浄瑠璃はまさにその一つなのだが、残念ながら訳文が拙くて、ただ意は述べられるが元の情趣を保存できない。二世の縁の思想は完全に輪廻を基としているから、唯物思想が起こった現代では、心中する男女はおそらくもう蓮華台の慰藉は持ち得ず、その寂寞を増すことは免れないだろう。しかし昔はやはりたくさんそういう人がいた。もちろん経済的圧迫からもあったろうが、一半は「雅歌」にいう「愛情は死の如く強し」からであったはずだ。中国人は生命の重さを知らないようだ。だから如何にして善くその生命を捨てるかも知らない。そして又何時何処でその生命を奪われても愛惜しない。まして死のように強いものがあることを知らない。だから情死というような事は中国では絶えて見つけることはできないのである。

心中を鼓吹した豊後の掾は情死をもって終わったという。ならばわたしもこうした事を少しは喜ぶだろうか？と尋ねる人があろう。「いや、いや。ちっとも。」 民国十五年三月六日。

三月七日の日本語『北京週報』（199）を見ると、記載がやや詳しく、それによると女は年十八、男は名を伊藤栄三郎と言ひ、死後は遺書に書かれた通り朝陽門外に合葬された。女にはその父に残した手紙があり、自ら薄命を嘆き、併せて諄々と父母にどんなに貧乏しようとももう妹を芸妓に売らないでと頼んであった。栄三郎は俗歌風の絶命詞一章を作っている。その詞に云う。

「交情いよいよ深ければ、この世はいよいよ狭く思われる。死んで花実が咲くものかとは云うものの、生きていたとてどうせ一緒になれはせぬ、何を惜しもう二つの命。」<sup>v</sup>

『北京週報』の記者は巻頭語ですこぶる同情的な論調であるが、「北京村の紅一点」という記事では男女二人の会話を想像して、いささか什匿克（これは孤桐社主の cynic の訳語）の気味を免れず、死者に対して取るべき態度ではないようだ。中国人が情死を理解できないのは、大陸的あるいは唯物主義のせいだから、こうした言い方はあるいは正しいのかもしれない。日本人が中国に来ると、たぶんとても唯物主義の影響を受けるのだろう。だから彼らは時に奇怪に思ってしまうようだ。

※初出：1926年3月15日『語絲』第70期

<sup>i</sup> 佐々醒雪『日本情史』新潮社 明治42年12月初版 「近世」p.270.

<sup>ii</sup> 『江戸軟派雑考』尾崎久弥著 春陽堂 大正14年6月初版。主に「評釈藤蔓恋のしがらみ」による。

<sup>iii</sup> 同書 p.511. 「起請文の事 一そもじさまと夫婦の契約いたし候所実正也然る上は親兄弟たとへいかやうに申候共外に夫持申間敷候かやうに申事はすこしも偽御座候はば日本六十余州の神々の御罰をかふむり未来永永ならく地獄へ落入うかむせ有間敷候依而起請文如件 年号月日

女の名 血判 男の名」

<sup>iv</sup> 同書 p. 495～500. 「わしほどいんぐわなものはなし。五つや六つでふたおやにしにわかれ、あにさんひとりをたよりにして。あさなゆうなのかんなんを。なきあかしたる月や日の。めぐみもつきてこのさとへ、うられてきたは身のいんぐわ。にしもひがしもしらばこそ、やりてにしかられ、めうだいのきやくしゆに夜すがらいびられて。なみだをしぼるそでとめて、おまへひとりをたよりぞや。たとへ野のすへやまのおく、どんなひんくもいとやせぬ、手づからわたしがままたいて。たのしむも恋。くるしむもこへ。こいといふ字がさすわいな。まことしんぼう一つぞや。かわゆうてかわゆうてすいになるほどぐちになる。きしやうをまもるやくそくのかみさんがたもきこへませぬ。とてもそわれぬならば、いつしよにころしてくださいせと。そではなみだのにわたずみ。おとこもなみだのかほをあげ、これはやぎぬ、人げんはのかぜのまへのともしびのごとく、この世はゆめのかりのやど、みらいはおなじれんげざと。おとこのことばにはやぎぬは。うれしなみだともろともに。くさばのしたでととさまやかかさまもさぞおうれしう御ざんせう。おつつけお目にかかるから、やいばにかけしわがつまを。かならずうらみてくださすな。ひごふのしにのつみとがを。ゑんまさんがしかるなら、わびことをして下ださんせ。ゆうてんさんやしやかさんのよもや見すてはさんすまい、おそばへいんであさゆうのおちゃやこうはなをきをつけて。この世のつみをほどこさん。なむしやかによらひ。ゆうてんさま。たすけてたまへなむあみだぶつ。」

<sup>v</sup> 『北京週報』199号 1926年3月7日 卷頭言「北京なる日本人の若き男女二人が、数日前山西〔西山の誤〕の旅館で、支那には珍しい情死をした。女は芸妓である。その父に宛てた遺書には、此世に於るわが身の不運を歎きつつ、せめて一人の妹だけは、如何なる貧苦の中にもありとも売らるるものなどにはせぬやうくれぐれも頼みありと。同情するものは彼等の為に一掬の涙を濺ぎ、嘲るものはたわけもの奴等がといふ。かかる事件を見るにつけても、間違つた唯心論の人心に浸潤久しくして、此世を毒するの罪の甚深なるに憤りを為さねばならぬ。弱きもの、貧しきもの、虐げらるるもの、彼等は其生ける天地に何らの光明与へられずして、更に死の永久の暗黒裡に、未来の幻影に欺かれ、蛇に吞まるる蛙の如く吸はれ行く。弱き者の滅ぶるは已むなきの則といふも、かくて心のやさしきものも亦堪へず、適者生存実は忍者生存となる。（以下略）」

「伊藤の辞世」「深くなるほど浮世がせまい死んで花実が咲かぬといへど生きてそわれぬ、何のをしかる二人が命」

「朝日軒」とは当の『北京週報』に「会席御料理 北京崇文門河沿頭」と広告を出している。